

黙示録3章1-13節 「慢心する教会、わずかな力の教会」

1A 名ばかりのいのち 1-6

1B 七つの御霊を持つ方 1

2B 死んでいる教会 1b-3

1C 名ばかりのいのち 1b

2C 目覚め 2

1D 残りの者たちのカづけ

2D 完了していない行い

3C 悔い改め 3

1D 聞いたことの思い起こし

2D 盗人のような来臨

3B 衣を汚さなかった者たち 4-6

1C 白い衣 4

2C いのちの書 5

4B 御霊の告げられること 6

2A 開かれた門 7-13

1B 聖なる真実な方 7

2B ダビデの鍵を持つ方 7-8

1C 城門の開閉 7

2C 少しばかりの力 8

3B すぐに来られる主 9-11

1C 足もとにひれ伏す偽り者 9

2C 試練の時から守り 10

3C 自分の冠 11

4B 神殿の柱にある名 12

1C 外に出ない保障

2C 天のエルサレムの名

5B 御霊の告げられること 13

本文

黙示録 3 章に入ります。アジアの七つの教会のうち、五つ目に入ります。

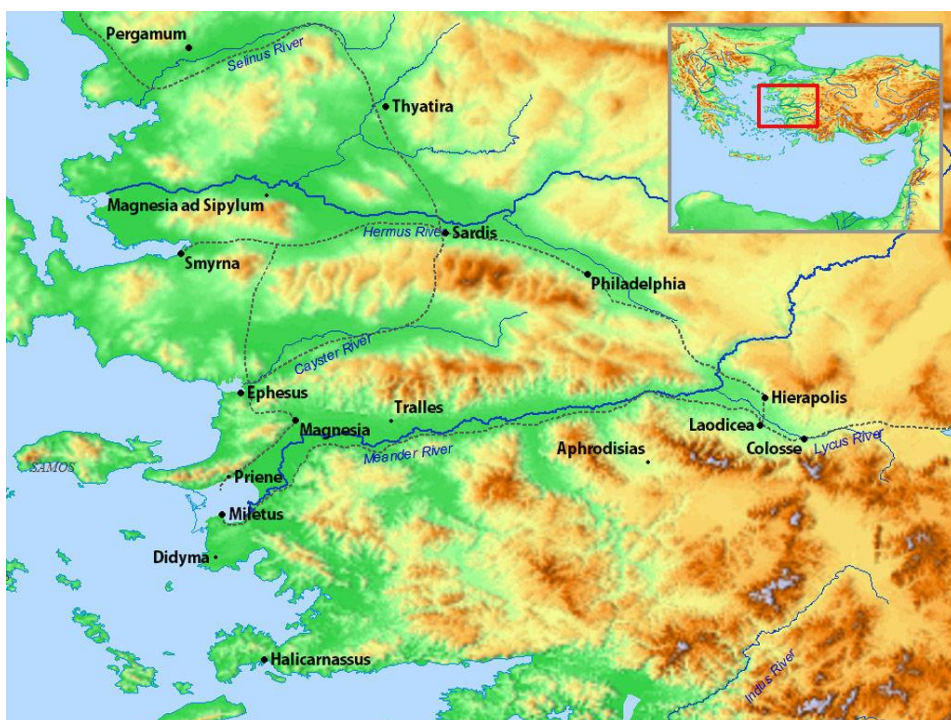
1A 名ばかりのいのち 1-6

1B 七つの御霊を持つ方 1

¹ また、サルディスにある教会の御使いに書き送れ。『神の七つの御霊と七つの星を持つ方が、こ

う言われる—。

サルデスは、ティアテ
ィラからさらに南東に約
50 km内陸に入ったところ
にある町です。紀元前 7
世紀のリュディア王国の
首都です。アジアの中心
地である、エペソ、スミル
ナ、ペルガモンからの街
道が交わるところにありま
す。内陸からエーゲ海に
通じる重要な街道の途上
にあるということで、軍事
面でも貿易においても要
所になっていました。そし



てサルデスには広大な平野が広がっていて、そこを支配できるという利点もありました。それで、膨大な富が集まり、リュディアの王クロイソスは「富める者」と同義語になっていました。美術工芸に優れていて、金銀の貨幣を初めて铸造したのもサルデスです。そして、ティアティラと同じように、染料や繊維でも有名でありました。後で、「白い衣」を主が与えるという約束があります。

サルデスに特徴的なのは、トロモス山の山裾の険しい高い尾根に、アクロポリス(城砦)を建てたことです。これだけの自然要害は珍しく、難攻不落とされていました。ところが、あっけなく敵の手に落ちた歴史を持っています。しかも一度だけではありません。

ペルシアのキュロス王が、この町を包囲したのですが、どこからも攻め上ることのできる隙がないように見えました。ある兵士がじっくり見ていると、城壁の上から、兜を落としてしまった者が何の苦労もなく下に降りてきて、それからまた上がっていく姿を見たのです。つまり、隠れた坂道がそこから辺にあるということです。それで秘かに精鋭部隊にそこから侵入するべく、その山道を上っていったところ、城壁のところまで来ました。ところがだれも護衛していません。サルデスの兵士たちは、自然要害に自信を持っていたので、目を覚まして見張る必要を感じていなかったのです。こうして、いとも容易くこの町を征服したのでした。そして二百年後、同じようにしてギリシアのアレクサンドロス大王が攻め取りました。

このような歴史を持つサルデスにある教会は、イエスの次のことばを聞いて、ずっしり来たことでしょう。「あなたは、生きているとは名ばかりで、実は死んでいる。」自然の要害によって、自分たちは生きていると思っていた彼らが、殺されてしまったのと同じように、霊的に眠っており、死んで

しまっているのだと、主は指摘されたのです。

ここ 1 節で、主は、ご自身を「神の七つの御霊と七つの星を持つ方」と言い表しています。それぞれの教会に対して、ヨハネに現れたお姿の一部を紹介しておられるのですが、サルデイスにある教会に対しては、七つの御霊と七つの星、すなわち、神の御霊をもって、諸教会全体を支配しておられるのだということをお話しになっています。「七」は神の数字で完全であることを示します。教会とは、神の御霊がおられるところです(1コリ 3:16)。

2B 死んでいる教会 1b-3

1C 名ばかりのいのち 1b

^{1b}わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、生きているとは名ばかりで、実は死んでいる。

他の教会に対してと同じように、主はサルデイスの教会の行いを知っておられます。主からは何も隠すことはできない、すべての行ないを知っておられます。これまでの教会は、主は、彼らをほめるため、慰めるために、「知っている」と言われていました。けれども、ここでは叱責する言葉として使っておられます。

「生きているとは名ばかり」ということです。ですから今、サルデイスの教会があれば、「すごいじゃないか、生きた教会ではないか。」と見えるのです。しかし、実はそうではない。良い評判があるからといって、そこが御霊の命を持っている教会とは言えないのです。活動が多くあって、にぎやかな礼拝賛美があって、キリスト教の世界の中ではよく知られていて、誰もが知っているというような場合でも、本当は死んでいるということはありません。あるいは、教えにおいてはとても正しくて、健全であると言われる教会が、その内実は死んでいる、ということがあります。

何をもって、死んでいるのか？これまでの教会を見れば、明らかです。エペソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラの教会ですが、スミルナを除いてイエスは全てに責めるべきことがある、と言われます。けれどもイエスの名を保っていることによる、戦い、あるいは葛藤がありました。信仰の戦いが、その異教の文化や物質的豊かさの中で熾烈なものがあつたのです。その中で妥協をしたり、なすがままにしていました。葛藤があることが前提でした。

しかしイエス様は、その信仰の戦いさえしていないことを指摘しておられます。ちょうど、上流に向かって泳いでいる魚は生きているけれども、下流に流れる魚が死んでいるのと同じです。周りの文化との対立する接点がない、ということでもあります。「なんとなく満足していて、特に何かすべきことはない」という霊的な無感覚、無気力です。悪魔にさえ相手にしてもらえない死んだ状態であると言えます。

慢心は、霊的な敵です。士師の時代のことを思い出してください。ヨシュアたちが、約束の地に

入り、カナン人たちと戦い、攻め取っていきました。けれども、すべての人を追い出さませんでした。そして、戦うことをやめ、共に暮らしました。そうすると、次に、彼らはカナン人たちの偶像、バアルやアシェラを拝み、仕え始めたのです。それで、主は彼らに虐げられるままにされました。こうあります、「士 3:1-2 次が、【主】が残しておかれた異邦の民である。主がそうされたのは、カナンでの戦いを全く知らないすべてのイスラエルを試みるためであり、2 ただ、イスラエルの次世代の者、特にまだ戦いを知らない者たちに、戦いを教え、知らせるためであった。」主は、再び立ち上がって、戦うことをサルデイスの人々に話しておられます。

2C 目覚め 2

1D 残りの者たちの力づけ

^{2a} 目を覚まし、死にかけている残りの者たちを力づけなさい。

死んでいる彼らに対して、イエスは、「目を覚まし」なさいと言われます。主は何度となく、私たちにこの命令を与えられました。それは、悪魔による攻撃が激しい時に、その戦いの中で、次に来ることをしっかりと見ていなさいという意味合いで使われています。ゲッセマネの園において、「マタ 26:41 誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」と言われました。彼らは目を覚ましていなかったので、イエス様を捕える者たちが来た時に逃げてしまい、ペテロはイエス様を三度、否みました。

そんなことをしてしまうペテロに対して、主は、前もって語っておられました。「ルカ 22:32 しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」と言われたのと同じです。自分自身が死んでいることに目を覚ますこと。そして、主に立ち直ること。そして、立ち直ったら、多くのつまづいてしまっている兄弟たちを力づけることです。

2D 完了していない行い

^{2b} わたしは、あなたの行いがわたしの神の御前に完了したとは見ていない。

彼らには、完了したという慢心がありました。サルデイスの城砦が堅固であるように、自分も霊的には大丈夫だと安心しきっていました。あるいは、信仰の競走を走っているのに、自分は目標にたどり着いていないのに、もう大丈夫だ、ほとんど走ったのだからと言って、立ち止まってしまいました。まるで、ウサギとカメのウサギのようです。あと一歩なのに、眠りこけてしまうんですね。

霊的には、これは致命的です。ちょうど血流が止まるようなもので、血液や流れているからこそ酸素を送り込むことができるのであり、血があることそのものが命をもたらしているではありません。途中で完成したと思った人で、ヤコブがいます。ラバンとの確執がありそこを流れ、次にエサウと会う時に、御使いとの格闘があり、イスラエルとの名が与えられました。そして彼はヨルダン川

を渡り、主が会ってくださったところ、ベテルに行かなければいけないのに、その途中の町シェケムで滞在し、自分の名を記した記念碑まで作ったのです。その結果、シェケムの主の息子から娘ディナが凌辱を受けました。そしてそこから出て行く時は、いつの間にか異教にまつわる物を身に付けていました。主は、「ベテルに上りなさい」と命じられます。

3C 悔い改め 3

1D 聞いたことの思い起こし

^{3a} だから、どのように受け、聞いたのか思い起こし、それを守り、悔い改めなさい。

悔い改める必要があります。どのように、悔い改めるか？自分が生きていとされていること、つまり、かつて、福音のことばを受けて、聞いていることがあります。それを思い起こして、守るという事で悔い改めることができます。原点に戻ると言ってよいでしょう。

私が、カルバリーチャペルに初めて訪問した時に、グレッグ・ローリーによる伝道集会がありました。そこで、多くの人が喜びながら賛美していました。彼の説教には、「あなたは罪人です。悔い改めなければいけない。」というものがありません。皆、喜んで聞いています。私だけが悲しい顔つきになりました。どうしてか？初めに、罪人だと認めて、へりくだって、それで罪赦されたはずなのに、自分自身が認められることを求めていたからです。恵みによって始まったのに、自分の行いによる義を求めている自分がいました。それで、悲しくなったのです。初めに聞いた福音は、それで完了するのではなく、福音の中に生き続けるのです。

2D 盗人のような来臨

^{3b} 目を覚まさないなら、わたしは盗人のように来る。わたしがいつあなたのところに来るか、あなたには決して分からない。

主はご自身が再臨されるにあたって、何度となく、「盗人のように来る」と言われました。それは予期せぬ時に来る、ということです。私たちが目を覚ましていて、光の中を歩んでいたら、主は盗人のようには来られません。「1テサ 5:6-9 ですから、ほかの者たちのように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう。7 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うのです。8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛の胸当てを着け、救いの望みとかぶとをかぶり、身を慎んでいきましょう。9 神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。」

しかし、目を覚ましておらず、自分が死んでいるのに気づかなかつたら、この方は思わぬ時に来られることとなります。「マタイ 24:43-44 次のことは知っておきなさい。泥棒が夜の何時に来るかを知っていたら、家の主人は目を覚ましているでしょうし、自分の家に穴を開けられることはないでしょう。44 ですから、あなたがたも用心していなさい。人の子は思いがけない時に来るのです。」

そして恥をかきます。「黙 16:15 ——見よ、わたしは盗人のように来る。裸で歩き回って、恥ずかしい姿を人々に見られることのないように、目を覚まして衣を着ている者は幸いである——」自分のしていることが、すべて明らかにされてしまうからです。

3B 衣を汚さなかった者たち 4-6

1C 白い衣 4

⁴しかし、サルデイスには、わずかだが、その衣を汚さなかった者たちがいる。彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らがそれにふさわしい者たちだからである。

「しかし」という言葉から始まる、勝利を得る者たちへの励ましの言葉です。サルデイスの教会は深刻です。大多数が主から離れており、主が盗人のように来られて恥を見るのですが、わずかに主のうちにいる人々がいる、ということです。

そして主は、「衣」について話されます。これは織物や染料で有名なサルデイスには、分かり易い話だったでしょう。これは、キリストにある新しい歩みについて語っている言葉です。サルデイスにある、異教や不品行、富への執着など、そうした汚れに対して、自分もその中にいることによって順応していった人たちは、衣を汚してしまっています。けれども、そうではなく、神の聖と義にかたどられた新しい人を身に付けて、それに従って生きようとしている人々は、汚していません。(エペソ 4:22-24 参照)

2C いのちの書 5

⁵勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。またわたしは、その者の名をいのちの書から決して消しはしない。わたしはその名を、わたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。

黙示録には、「白い衣」が数多く出てきます。例えば、7章14節、「この人たちは大きな患難を経た者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」小羊の血、キリストの血によって私たちが心が清められ、そして生活にも清さが表れます。これが白い衣であり、キリストが戻って来られる時には、この体そのものも変えられ、キリストに似た者になるのです。

そして大事な約束があります。「確かにあなたは永遠の命を受け継ぐのだ」という保証です。これまで、例えば、「2:7 勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。」であるとか、「決して第二の死によってそこなわれることはない。(2:11)」であるとか、ありました。ここでは、「自分の名がいのちの書に書き記されている」という事実です。

神には、ご自分のものとする者たちをご自分の書物に書き記しているという事実を覚えるべきです。モーセは、イスラエルの民の執り成しをした時に、身代わりに自分になることを主に申し出ました。「出 32:32 今、もしあなたが彼らの罪を赦してくださるなら——。しかし、もし、かなわないなら、

どうかあなたがお書きになった書物から私の名を消し去ってください。」

地上で獣、すなわち反キリストを拝む者たちが後に出てきますが、「13:8 地に住む者たちで、世界の基が据えられたときから、屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されていない者はみな、この獣を拝むようになる。」最後の審判において、主は名の記されていない者たちを火と硫黄の池に投げ込まれます。「20:12 また私は、死んだ人々が大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。数々の書物が開かれた。書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった。死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることにしがたい、自分の行いに応じてさばかれた。」したがって、名が消し去られない、という約束はとても貴いものであり、これに私たちが集中しているべきです。悪霊を追い出して戻ってきた弟子たちに、イエスは、そのことを喜ばれましたが、「ルカ 10:20 しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」と言われました。

4B 御霊の告げられること 6

⁶ 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。』

すべての七つの教会にあるように、これは単にその地域教会のみならず、全歴史の、全教会に対して主が御霊によって語っておられる言葉です。私たちの教会にも語られました。

2A 開かれた門 7-13

1B 聖なる真実な方 7

⁷ また、フィラデルフィアにある教会の御使いに書き送れ。『聖なる方、真実な方、ダビデの鍵を持っている方、彼が開くと、だれも閉じることがなく、彼が閉じると、だれも開くことがない。その方がこう言われる—。

フィラデルフィアは、前回学んだサルディスの町から南東、約 45 ㎞にある町です。アッタロス朝ペルガモン、つまりペルガモン王朝の町の一つです。エウメネス二世という人が建設しました。弟アッタロス二世を後継者としました。彼の別名が「フィラデルフォス(Philadelphos)」であり、ここからフィラデルフィアと呼ばれます。「兄弟を愛する者」という意味です。大きなローマ街道が、トロアス、ペルガモン、サルディス、そしてフィラデルフィアに通じており、通商路として栄えていました。

この町は、広くて、低いところにありますが、防衛のしやすい所がありました。ヘレニズムの前哨地として有名でした。そのためギリシア文化が豊かにありました。しばしば、「小アテネ」と呼ばれていたそうです。ギリシアの神々を祭った神殿も多く、ここはぶどうの産地で、酒と陶酔の神ディオニユス礼拝の中心地となっていました。それで、この人たちにとって、「門」は身近な存在です。敵から守るため門ですが、門を開けている、閉じられているというのはとても重要な意味を持ちます。

そして、ここは地震の多いところでした、断層の真上にあつたからです。紀元後 17 年の大地震によって、この町は徹底的に破壊されました。その復興に皇帝ティベリウスが援助したので、皇帝に感謝を表して、その町は新たに「ネオ・カイサリア(新カイサリアの意)」と、新しい名を付けました。倒壊した建築物の再建をしていくのですが、地震の後、大柱は残っていました。それで、イエスが「あなたがたは、柱としよう」とか、「新しい名を書き記す」という約束を与えられますが、ここにいるキリスト者にとって、大いなる励ましと慰めになったでしょう。そして、神殿や会堂など、建物の柱には、その建物の建築に貢献した人や、町に貢献した人の名が刻まれています。柱や名も、彼らには身近な存在だったのです。

イエスは、他の七つの教会と同じようにご自身の姿を紹介されます。ただ、ここでのご紹介「聖なる方、真実な方」です。黙示録によく出てくる言葉です。6 章 10 節には、神の言葉とイエス様の証しを立てて、それで首をはねられた魂が叫んでいる言葉の中にあります。「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。」

聖なる方、真実な方ということは、中傷され、迫害され、殉教した人々にとって、欲していた神のご性質であつたということです。聖なる方とは「別たれた」という事ですが、他の全てとは別たれていて、全く悪がないということであり、「悪があるのに、どうして聖なるあなた様が裁きを行わないのですか？」ということでもあります。そして、真実というのは、裏切らない、約束を守る、確かに愛しておられて、守り、報いてくださる、だから信頼のおける方だ、ということでもあります。しかし、神は悪から隔離された方であり、必ず、ご自分の正しさに従って、悪を裁いてくださる方です。裏切らない、真実な方です。

2B ダビデの鍵を持つ方 7-8

1C 城門の開閉 7

そして、「**ダビデの鍵を持っている方**」とあります。これも、1 章のイエス様の姿には出てきません。これは、イザヤ書にある神の約束から来ている言葉です、読んでみましょう。「22:20-24 その日、わたしはわたしのしもべ、ヒルキヤの子エルヤキムを召し、21 彼にあなたの長服を着せ、彼にあなたの飾り帯を締め、彼の手にあなたの権威を委ねる。彼はエルサレムの住民とユダの家の父となる。22 わたしはまた、彼の肩にダビデの家の鍵を置く。彼が開くと、閉じる者はなく、彼が閉じると、開く者はない。23 わたしは彼を杭として、確かな場所に打ち込む。彼はその父の家にとって栄光の座となる。24 彼の上に、父の家のすべての栄光がかけられる。子も孫も、すべての小さい器も、鉢からすべての壺に至るまで。」

これは、エルサレムに対する神の預言でした。王ヒゼキヤに仕える二人の側近がいました、シェブナとエルヤキムです。シェブナは、自分の報酬のことばかり考えていました。自分が老後、安泰に暮らし、荘厳な墓に入るようなことばかり考えていました。アッシリアがエルサレムを取り囲むような危機にあつたにも関わらず、です。しかし、エルヤキムは違いました。主を求めるヒゼキヤに忠

実に仕えていました。その忠実のゆえに、ダビデの鍵が渡される約束が与えられたのです。

鍵が何を意味するのか？ここに、「彼が開くと、閉じる者はなく、彼が閉じると、開く者はない。」とあります。エルサレムという城であります。その門の鍵を持っているということは、その町の運命が彼に掛かっていることを意味していました。門は、外敵が攻め入って来る破れ口にもなりません。日没の前に必ず閉めます。その後で遅れてやってきても、絶対に門を開けることはありません。そして日が昇れば、再び開けます。つまり、エルサレムの全権がその肩に任せられている、ということです。エルヤキムが忠実に仕える者であったので、主が彼の肩にダビデの家に関わることを任せるという約束でありました。

しかし、エルヤキム個人への約束を越えて、彼はメシアについての約束へと発展しています。ダビデの家について、エルサレムについての全権を持っておられる方が、イエス・キリストなのだということです。神の国、また新しいエルサレムに入る権限を、すべてイエス様が持っておられる、ということを表しています。

2C 少しばかりの力 8

⁸ わたしはあなたの行いを知っている。見よ。わたしは、だれも閉じることができない門を、あなたの前に開いておいた。あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。

主は、フィラデルフィアに対して、スミルナと並んで叱責の言葉は与えられておらず、評価しておられる言葉だけになっています。なぜ、その行ないをほめる言葉だけなのでしょう？迫害です。不信者のユダヤ人から、その会堂から中傷を受け、また追放されていたという背景があります。

当時のローマ社会は、カエサルを神とする皇帝礼拝によって忠誠心が図られていました。「カエサルが主である」という告白が、踏み絵でした。それをするのができないのは、ユダヤ人とキリスト者です。主なる方のみが主であり、カエサルは人であり、人を神とすることはできない、偶像礼拝であるからです。しかし、ユダヤ人共同体はローマ社会の中で社会的地位を得て、この言葉を告白しなくてよいように、除外してもらっていました。そこで、既に煙たい存在であったキリスト者に対して、彼らに対して会堂への戸を閉ざしたのです。

キリスト者は、初めはユダヤ教の一派「ナザレ派」でありました。それから異邦人も教会の中に集い、安息日を守らなくもよいということがあり、それでユダヤ教がイエスを信じる者たちを疎外するようになっていきました。そして何よりも、割礼を受けていない異邦人が、そのまま教会が受け入れていました。ユダヤ人だけに与えられていた特権が、会堂に異邦人を入れることで壊されることを恐れたのです。自分たちの共同体を守るためにキリスト者を追い出しました。

キリスト者らの前に、戸が閉ざされていました。会堂はコミュニティーセンターのような役割を当時は果たしていました。会堂の戸を閉ざされことは、彼らの共同体から外されることを意味していました。覚えていますか、それは、あの生まれつきの盲人が会堂から追い出されたことと同じです。目を癒やされた彼が、サンヘドリンの前で、イエスが神から来られた方であることを大胆に告白したために、追い出されたのです。しかし、その後でイエスが来られて、彼の前でご自身が神の子キリストであることを明かされて、彼は主を礼拝したのです。(ヨハネ 9:34-38)

ですからイエス様が、「わたしは、だれも閉じることができない門を、あなたの前に開いておいた。」と言われたのは、会堂はあなたがたに門を閉ざしたけれども、わたしがその全権で、あなたがたには、神の国に入る、新しいエルサレムに入る門を開けておく、ということです。黙示録最後の約束に、神の聖所と新しいエルサレムに入る約束をイエス様は与えておられます。21章には、一日中、都の門は閉じることがないとあります(25節)。主はご自分の都に彼らが入ることができるようにしてください。日本には、村八分という言葉があります。実際に、村の共同体の便益の八割を得られないようにさせて、生き殺しをさせました。その恐怖が植え付けられて、共同体に反することは言えないようにさせました。信仰告白によって、自分も大きな不利益を被るかもしれません。しかし主は、だれも閉じることのできない門を、開いてくださっているのです。

イエスが言われた彼らをほめる言葉に注目してください。「あなたには少しばかりの力があって」であります。わずかな力でよいのだ、ということです。小さなことであっても、主の御霊からいただいた力によって、忠実に神に仕えます。どんな小さな事柄でも、主に祈り、主から知恵をいただき、力をいただき、御霊に導かれます。主は、わずかなことに忠実である者に大きく報われます。

そして「わたしのことばを守」ることです。これは、主が命じられていること、主が願われていること、望まれていることを、しっかりと守っている、保持しているということです。そのわずかな力でいいのです、主のことばをしっかりと守ります。そして、「わたしの名を否まなかった」であります。これは、イエスを人の前で認めれば、彼らは門前払いされます。そうであっても、彼らは御名を否むことがありませんでした。それで主も認めてくださるのです。「マタ 10:32 ですから、だれでも人々の前でわたしを認めるなら、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。」

3B すぐに来られる主 9-11

1C 足もとにひれ伏す偽り者 9

^{9a} 見よ。サタンの会衆に属する者、すなわち、ユダヤ人だと自称しているが、実はそうではなく、嘘を言っている者たちに、わたしはこうする。

先ほど話した不信者のユダヤ人についてのことです。「サタンの会衆」とは、シナゴークがサタンからのものだ、ということではなく、キリストに愛された者たちを追放し、中傷することは、その背後にサタンがいるからだということです。

フィラデルフィアは、ギリシア文化が強いところだと言いましたが、ギリシア思想に影響された、ユダヤ人たちがいたと言われていました。ギリシアの神々への儀式の中で、去勢することがありました。そこで異邦人に対しても、「私たちは割礼をするが、あなたがたの去勢と変わらない。」と教えていたようです。だから、イエスを信じたとしても、割礼を受けなさいと言って改宗者にさせようとしていたようです。これは、まさにユダヤ主義者がしていたことで、異邦人はただ信仰によって清められるという恵みに反します。だから、忠実な異邦人の信徒は、無割礼のままに入ってきたのです。

しかしこれは、ローマ当局に知られたらヤバいのです。またユダヤ人でないもの、改宗者でない者が街道に入っていることは問題だし、ローマは、異邦人が唯一神を拝んでいるとは、けしからんと思っていたと思います。こうやって、ユダヤ人の社会からも、ローマ社会においても、彼らはつまはじきにされたのです。キリスト者は、往々にして、既存の共同体から、つまはじきにされます。

^{9b} 見よ。彼らをあなたの足もとに來させてひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを知らせる。

これは、キリスト者が神の国においてキリストと共に、統べ治めるということです。そして、これら迫害した者たちが神の国に入ることができず、塵を舂める屈辱を味わうということです。黙示 6 章で、殉教した魂が「なぜ復讐なさらないのでですか？」という訴えに対して主がお答えになられた、ということです。彼らはずっと、これら信者たちを悪者としており、自分たちが正しいとしていましたが、それが逆転するのです。

2C 試練の時からの守り 10

¹⁰ あなたは忍耐についてのわたしのことばを守ったので、地上に住む者たちを試みるために全世界に來ようとしている試練の時には、わたしもあなたを守る。

神の国の到来の前に、全世界に試練があります。2 章で、ティアティアラの教会のところで、悔い改めないなら「大きな患難の中に投げ込む」と言われていました(2:22)。6 章以降に、この全世界に対する試練、また大きな患難を、主ご自身が与える場面が始まります。フィラデルフィアの人たちには、この試練の時から守られるということです。

「あなたは忍耐についてのわたしのことばを守った」とありますが、ここでの忍耐は、耐久力というのに近い言葉でしょう。英語では perseverance であります。難しい言葉で「堅忍」と言います。困難にしっかりと耐えて、最後まであきらめないことを意味します。私たちがいかに、忠実であることが大切かを教えてください。ただ、忍耐についてのイエスのことばを守るだけで良い、ということです。ティアティアラの教会に対しても、「わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない。ただ、あなたがたが持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと保ちなさい。」と言われていました(2:15)。少しばかりの力でいいのです、それをもって、イエスさまのことばを守るのです。

ところで、「試練の時には」と訳されている言葉は、「試練の時から」と訳することができます。その時から彼らを守ると訳することができます。つまり、その時を経験しないで済むようにして下さる、ということです。地上には患難が降りますが、その患難を経ることがないようにして下さるということです。「Iテサ 5:9 神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。」主が天から来られて、私たちが空中にまで引き上げて下さり、後に来る大患難から私たちを免れてさせてくださいます。

3C 自分の冠 11

¹¹わたしはすぐに来る。あなたは、自分の冠をだれにも奪われないように、持っているものをしっかり保ちなさい。

イエスは「すぐに来」られます。これは、「来る時には、遅れることはない。すみやかに来る。」ということです。思いがけない時に、来られます。自分にはどうすることもできない、神だけの持つておられる定まった時があり、神にいつも信頼して、神を待ち望んで、それでその時が来た時にはいつでも、主の来られる用意ができています、ということです。

フィラデルフィアの人々には、既に、「あなたの冠」とあります。主が、信仰を全うする者たちには、義の冠や命の冠が用意されているとの約束がありますが、主がその信仰に対して栄誉と称賛を用意しておられます。その誉れを冠は表しています。そして、主にある尊厳を奪われないように、「持っているものをしっかり保ちなさい」とあります。

4B 神殿の柱にある名 12

1C 外に出ない保障

¹²わたしは、勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱とする。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上に、わたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書き記す。

これは、天における神の都、天のエルサレムに確かに入ることができる保証であります。救われているという保証です。黙示録 21-22 章に、最後の幻として鮮やかに、詳細に描かれています。

「わたしの神の神殿の柱」であります。彼らには先ほど話したように、身近な存在でした。彼らが地震で倒れる柱を見ているなかで、自分は柱として立っていることができるという保障です。それから、「彼はもはや決して外に出て行くことはない。」とあります。これも先に話したように、ユダヤ教会堂から追い出されている彼らによって、都から出されることはないというのは、とてつもない安心感をもたらします。そもそも柱となっているのですから、出て行きようがありませんね！

そして、神の都の中でイエスのものであるという認証が押されています。「わたしの神の名」「わ

たしの神の都」「わたしの神のもと」とイエス様は、「わたしの」を繰り返しておられます。イエス様がこの新しい都、そして父なる神がご自身のものであることを強調し、その所有権の中であなたがたを守る、と言われているのです。22章5節、新しい都にいる者たちに、「彼らの額には神の名がついている。」とあります。そして、「新しいエルサレムの名」というのは、22-21章にある天から降りてくる新しいエルサレムのことです。名は、アダムが動物につけたように、名を付けたものの所有を意味しています。彼らは、主イエスの所有の民となるということです。

2C 天のエルサレムの名

そして「新しい名」を書き記す、というのは、全てが新しくされたその都に住む時に、新しくされた関係の中でイエスのものとなっているということでもあります。これも当時の町の建物にありふれていた光景で、彼らにはすぐに心に入りました。柱には、その建物の建築に貢献した人や、町の中で英雄的な活躍をした人など、名が書き記されています。カペナウムに行くと、そこにあるシナゴークの柱には、名前が刻まれているを確認することができます。そのようにして、主の自分の名を、しかも新しい名で覚えていただけるということです！

5B 御霊の告げられること 13

¹³ 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。』

私たちが、彼らと同じように主に対して、わずかな力でもそれをしっかりと守っているならば、主は私たちの前に広い門を開けておいてくださいます。それは、神の国に入る門であります。大きな力を要しません、イエスの教会において、ただイエス様に言われることを聞いて、それに誠実に、へりくだって、忠実に従うことです。

こうして、慢心していることがいかに危険であるかを知り、その一方で、わずかな力でも忠実でいるときに、どれほどの報いがあるかを知ることができました。